

【配点】 ①・②・③ 各2点×20 ④⑤・⑤① 各6点×2 その他 各4点×12

1

1 合唱
2 帯
3 救出
4 観察
5 追加

2

1 K
2 T
3 S
4 S
5 K
6 S

3

1 ウ
2 エ
3 ア
4 イ

4

1 I
D
II A
好意 B
無 2 ウ
3 A
E B
イ C
ア
(1 II・3 各完答)

4 I
して II
ない III
おそ
(4 完答)

5 人の好意はありがたく受け止める
(5 同意可)

6 しれない。
(6 同意可)

5

1 公民館の七夕飾りの短冊に、
凜に帰りたいと書いていた
(1 同意可)

2 エ
3 A
手 B
耳 C
背
(3 完答)

4 貧乏くさい
(4 同意可)

5 I
イ
II
親の会社
が 6 ア

① (漢字の書き取り)

1から10までの漢字は全て、ベーシックのトレーニングテキストにて出題されているものである。漢字は、正しい字形を覚えるために反復練習をするのはもちろんのこと、意味調べもして、漢字と意味とをセットで覚えていくことが大切である。また、正しく覚えるために、ふだんから一画一画でいいねに書くことも心がけよう。1の「唱」の右下が「目」にならないように気をつけよう。また、7の「巢」を「單」と書かないようにしよう。

② (敬語)

1：身内である父の動作なので謙譲語。2：「です・ます・ございます」は丁寧語であることをおさえる。3：相手側の娘なので尊敬語。4：相手側からの「親切」なので尊敬語。5：自分側が渡す品なので謙譲語。6：相手側の行為なので尊敬語。

③ (ことわざ)

1「損して得取れ」「負けるが勝ち」：一見矛盾しているように見えても実は深い教訓や心理を伝える逆説的なもの。2「のれんに腕押し」「ぬかに釘」：いくら働きかけても効果がでないこと、手応えが感じられないこと。3「身から出たさび」「自業自得」：自分自身の行いや過ちが原因で自分自身が苦しむこと。4「百聞は一見に如かず」「論より証拠」：他者から聞くよりも実際に体験する方が早いということ。

④

1Ⅰ「こういう」は指示語で、ふつうは直前を指すが、今回は直後を指すパターンである。筆者は、「若い男性が席を立ち、老人に席を譲ろうとしたが、老人が断った」という光景だけではなく、そのあとの「青年はもう一度席を譲ったが、老人がもう一度断った」↓「青年も立ったままになってしまった」↓「周囲の人も座れずに席が空いたままになった」という一連の流れをずっと見ていたのである。

Ⅱ 青年のプラスの気持ち、老人は断ることによって台無しにしてしまったのである。設問の指定条件にも注意しよう。2 青年が席を譲ろうとしたのに老人が断ったことに対して、本文十一行目で「せっかくの親切をむげに断ることはないではないか」と書かれていることから、筆者は青年のことを「親切だ」と思っていることがわかる。

3 青年は、せっかく譲ったのにどうして座ってくれないのだろうと思っているはずである。老人には、自分のしたことによって車内の雰囲気が悪くなったのを感じとり、その責任からのがれようとするようすが感じられる。ほかの人は直接関係はないものの、青年と老人の周りに漂う気まずい雰囲気を察し、空いた席に座ることに「気が引ける」のである。

4 「副詞の呼応」である。代表的なものはしっかり覚えておこう。

5 電車の中で見かけた光景(事実)から、筆者はどのようなことを考えたのだろうか。――線③の二行前から、事実に対する筆者の感想が書かれている。そして最後の段落に筆者の意見がまとめられている。「青年の好意を老人が断った↓断らなくてよいのではないか↓人の好意はありがたく受け止めたい」という流れである。

6 ◎の文の「そんな理由」が、老人が断った理由を指していることには気づくだろう。――線③からはじまる段落で「老人が断った理由」を筆者が想像しているので、このあとにはいることとなる。

⑤

1 梢が美貴に対して「妙に無愛想でよそよそしかった」理由は、文章後半の美貴と梢の会話部分で梢自身が語っている。梢は以前に、美貴の祖母から美貴が小学校のころにお嬢様学校である清凛に通っていたことを聞かされていた。そして美貴とうちとけて仲よくなったと感じていたところに「清凛に帰りたい」と書かれた短冊を目にして美貴が書いたものであると察し、「美貴は一般的な中学生である自分たちのことをきらっていて、お嬢様学校である清凛にいたころの方がよかったと思っているのだ」と早とちりしたのである。

2 「余計に」に注目する。「給食の時間はいつも憂鬱」であることにくわえて、「おまけにきょうは…不機嫌な空気が伝わってきて」しまい、普段よりもいっそう気分が悪いのである。

3 A「もみ手をする」：何かを頼む時に、両手をすり合わせてお願いすること。B「耳を疑う」：信じられないような話を聞いておどろくこと。C「背を向ける」：ここでは物理的に後ろを向いていることを指すが、相手に対して無関心な態度をとったり、相手にそむいたりするという意味もある。

4 美貴と梢たちとの会話の流れをたどっていくと、やりとりの中で美貴が「…っていうのはそのとおりだから…」と発言している。ここから、前の部分で「貧乏くさい給食は食べたくない」と言われたのではないかと見当をつけることができる。

5 文学的文章では場面のイメージが肝要である。――線④からは美貴が梢と会話している場面が続く、なぜ美貴が清凛にいたことを梢が知っているのか、梢がその話を誰から聞いたのかを問いつめている。それに対する梢の返答の中にⅠ・Ⅱの答えにあたる内容が書かれている。

6 文章全体を通して、内心では動揺しつつも対外的には毅然とした態度を取ろうと努める美貴の姿が描かれている。憐れみを屈辱と取る姿にもプライドの高さが読み取れるが、元から中学校のクラスメート達を見下しているわけではない。文章冒頭より前の部分では梢たちと仲よくしているであろうことを読み取り、エの「周りを見下している」を選んではいけないことに気づけるとよいだろう。